

和紙研修生にインタビュー

《第2弾》

野口結衣

(愛知県出身)

愛知の工業高校を卒業後、自動車部品工場で金型（かながた）の試作などを作る部署で働いていたという経歴の持ち主の野口さん。ものづくりは小さな頃から好きだったと語る。幼稚園の頃に体験した絞り染めを自分で完成したときの満足感が今でも忘れられないという。ものを最初から作り始め、完成品まで持つていくというその一連の作業に達成感を覚えたのだという。

石州和紙の研修生募集の情報をインターネットで見つけ応募し、この三隅町に辿りついた。島根には一度も訪れたことはなかった。自分の実家と変わらぬ雰囲気、特に驚くこ

とはなかったと語る。しかし、愛知の地元では見られなかった波や岩場のある綺麗な日本海がすぐそばにあるので、海を見ると開放的な気分になれると語る。三隅に住み始めて一番

驚いたのは虫の大きさであった。大の虫嫌いの野口さんは、虫との格闘にかなり労力を費やしている。でも、最近は新しい虫でなければ、ある程度は対処できるようになってきた



野口さんが撮影した写真

という。和紙研修としてこれまでに芽かき、そぞり、塵取りなどの工程を素早く正確に出来るように訓練してきた。もともと細かい作業が好きで、このよう地道な作業は苦にならないと語る。

プライベートでの楽しみは、写真を撮ること。普段は風景写真を撮ることが多く、これから大好きな戦国武将の史跡が多いこの地域を少しずつ巡り、写真を収めていくことを楽しみにしている。また知り合いに石見神楽に連れて行ってもらったことをきっかけに、石見神楽の写真も撮り始めた。機会があれば、最初に観た松原神楽社中を撮りに行くが、神楽は暗いところで上演することが多く、しかも動きが速いので、撮影技術を磨く良い題材になっているという。

和紙に対する目標はと尋ねると「まだまだです」と今を精一杯頑張っている様子で答えてくれた。

三隅中学校 3年生

石州和紙会館で職場体験

9月20日に三隅中学校3年生の中前君と永田君が石州和紙会館に職場体験にやってきました。石州和紙会館職員の倉井さんより、会館では来てくれたお客様にどのように石州和紙について説明しているかなどの話を聞いた。歴史パネルやビデオなどが

あることも紹介した。その後は、後継者が石州和紙を乾燥している作業を見学したり、実際に一〇〇枚用の名刺の箱を制作する体験も行った。倉井さんの説明を受け、治具（じぐ）を使いながらハケでのりを塗り、ヘラで石州和紙を伸ばしたりしながら最後までしっかりと作業し完成させた。



名刺の箱作りに挑戦する生徒たち



出来上がった名刺の箱と記念撮影